

# 『運命の訴へ』覚え書

——有島武郎・△未完▽の周辺——

内 田 満

七〇

『或る女』を書き終えた作家有島の晩年というべき4年間(大正8年6月から大正12年6月まで)をながめわたすと、そこには、長編小説になるはずだった『運命の訴へ』と『星座』の二編が未完のまま横たわっている。同じく未完とはいいながら『星座』は作者自身の意志によって創作途上の長編の一部として発表されたものであり、『運命の訴へ』は「焼却すべき悲境に陥つた」<sup>①</sup>としているものであるから、同列に論じることができない。一方は作者の手を離れて独立した〈作品〉ではないのだから、作品論のような形でこれを扱うことは当を得ないであろう。永田哲夫氏は「未完中絶作品の創作意図を揣摩慮測することは避けなければならない」として、執筆期間に焦点をあわせた論考をまとめている。たしかに、『運命の訴へ』一編の〈創作意図〉をたどる通路から有島武郎という一人の作家を全体的にとらえる視野はひらけてこないだろう。ある意味で、

それは一つの袋小路であったとも言える。しかし逆に、この作家の創作方法をたどっていくうえから言えば、この創作の放棄をへどん底」とした大正9年の彼の苦闘を素通りするわけにいかぬのも事実である。上杉省和氏は、「この未完稿『運命の訴へ』こそは、有島の『新しい衣裳』となるはずの作品であった、にもかかわらずそれが未完に終わったことは彼をうちのめし、深甚な打撃を与える結果を招いた、したがって、この一編の検討は、有島の人と文学を考える上で決して意味のないことではあるまい」<sup>③</sup>として創見にみちた論考を発表している。わたくしもまたその驥尾に付して、『星座』誕生の前史ともいえるべき『運命の訴へ』創作へのいとなみとその挫折、さらにつづく再起への歩みをたどってみたい。その道行きは、この作家の創作活動の最後の折返し点を見出すまでの泥まみれの力走であったとみなされるからである。

## 1 執筆に着手するまで

### ——粒良達二の出現

大正9年、それは第一次世界大戦戦後の好況が一転して〈戦後恐慌〉に移った年であり、わが国最初のメーデーが一万余人を結集しておこなわれた年でもあった。<sup>④</sup>この年、家族を熱海に送り出して静かに正月を過ごした有島は、1月14日から17日まで、風邪にかかって床につくはめになった。快方に向かった彼は、中戸川吉二・大島豊・今野賢三・吹田順助・原久米太郎らに相ついで滞っていた手紙を書き送っているが、その中にひとり、粒良達二というこれまでに交友のなかつたはじめての宛名が出てくる。

へ風邪の為臥床してゐて漸く今日床を払ひ直に此返事を認めます。長い御手紙を読んで私の心は暗くらくならずにはゐられませんでした。楽天的な心持ちで人生を見てゐる私も、あなたの御一家に起つた事件のやうなものに出遇つては一たまりもなく悲観してしまひます。そこには本当に恐ろしい運命の狂ひが現はれてゐるやうです。<sup>⑤</sup>く

粒良達二の長い手紙がどのような内容のものであつたか、この書簡だけで具体的に推し測ることはできないが、へ恐ろしい運命の狂ひを感じないでいられないような暗い内容のものだったのである

### 「運命の訴へ」覚え書

う。有島は右の文面のおとにへあなたがあなたの全努力を惜しむ事なくば自ら其中に一道の大路が開けわたることを知るものですと激励し、もし自分と話してみようと思えるなら訪ねて下さつてもよい、と書き添えている。粒良はそれに力を得て再度のたよりを送つたらしい。約一月後に、同人にあてた第二信がある。

へ：それはどれ程の苦しみだかよくお察し申す事が出来ると思ひます。然し振理が何を兄に求めてゐるかを誰れが大胆にも云ひあてる事ができません。それは兄自身すら容易に定むべきものではないと思ひます。約百記ヨブを読んで御覧なさい。：兄よ、兄の棘は大きく痛ましい。然し兄のみが総ての人から全然特別な事情に置かれてゐると思ふのは誤りだと思ひます。万望兄が絶望失意のどん底から勇ましく跳ね返つて新しい世界に生れ出て来られるやうに祈ります。<sup>⑥</sup>

第一信に自分ならばひとたまりもないへ恐ろしい運命の狂ひだと言ひ、第二信にヨブ記がようやくそれを慰めてくれるのではないかと、と一読を勧めていることを考えあわせると、粒良のへ一家に起つた事件とこののはなまかなでござとではなかつたと思像される。周知の通り、「ヨブ記」は旧約聖書の中の一編である。莫大な資産を持ち、平和な生活に恵まれていたヨブという敬虔な信者が、サタン（悪魔）のそそのかしによって神の試みにあい、資産を奪わ

れ、さらにその身も不治の病にさいなまれる。しかし彼は神を信じつづけ、驚くべき忍耐をもってその試練に耐えぬくのである。

粒良達二あての第二信を有島が書いたのは大正9年2月21日であった。その文中には、〈二十五日まではさし通つた用事がありますから其後に来るなら来て下さい。〉とある。当時彼は大阪朝日新聞の募集した懸賞小説の選考に当たっており、読んでも読んででもそれが完了しないことにあせりきっていた。この二つの書信の内容と、大橋房子あての、〈例の大阪朝日の選を二十六日の未明に漸く終へました。ほつと息をつきました、もうあんなことは金輪際しない積りです。〉という書面を重ねあわせると、次のような経過がわかる。

A 有島は粒良達二からの二度の書面によって、未知のこの人物が〈絶望失意のどん底〉にあることに心を動かされた。

B 直接に会って話を聞くことが相手の気持をいくらかでもやわらげることになるのなら、そうしようと考えた。

C しかし、「大阪朝日」の懸賞小説の選考に追いつめられていた

ので、面会はそれが済んでからにしてほしいと伝えた。

二人がはじめて会ったのがいつであったか、いまはわからない。

しかし確かに会っている。後に述べるが、同年9月になってから〈この間お目に懸つた時〉と書いているのは初めての出会いでなく、有島の方から先方に出向いた際のことであったと推測される。おそ

らく、2月下旬から3月上旬の間に——つまり第二信からさほどたない時期に粒良は有島を訪問している。切迫した胸中を二度にわたって訴え、25日以降ならば会ってもよいという趣旨を伝えられたのだから、粒良の側に、有島とじかに会って話を聞いてもらい、また話をしてもらいたいという気持が動いていたとみるのが自然であるし、有島第二信の〈二十五日までは……〉という文言は訪問の意志表示をうけてのことばとみるべきであろう。

このころ、有島の方は「朝日」の次に「惜みなく愛は奪ふ」（以下『愛は奪ふ』と略記）をひかえていた。〈今月は朝日の懸賞小説に全力を集注する積りだ。来月からは「惜しみなく愛は奪ふ」だ。〉これは1月上旬にたてた予定からさらに一カ月も延びてしまつて、説の選考が年頭にたてた予定からさらに一カ月も延びてしまつて、『愛は奪ふ』が3月にすり込むことになつたのである。したがつてこの時期の彼の創作志向は『愛は奪ふ』に向かつていたはずだし、つとめてそれに集中することが周囲の要請でもあった。

おそらくこの時期に、有島は粒良とはじめて出会つていていると思う。有島はこの初対面の人物から彼を〈絶望失意のどん底〉にたたくき込んだ〈事件〉のあらましや現在の胸中などをつぶさに聞いたであろうし、できる限りのはげましのことをおくれたことと思われる。しかし、この時点での有島の粒良に対する対し方は、相手の生

きさまを（奪う）方向にはなく、相手に生きる知恵を（与える）方向に動いていたと思われる。端的に言えば、まだこの段階では粒良達二の遭遇した（事件）なり生きさまなりを自分のものにするには至らなかつたのである。

『愛は奪ふ』を書き終えた有島は4月1日に熱海から帰京したが、まだ新しい仕事は始まってはいない。彼は4月30日夜東京を發つて西下、5月22日朝に帰京している。これは同志社における講義のために京都へ赴いたもので、その旅程の間に名古屋・大津・奈良・明石・大阪などに立ち寄っている。この旅行から帰って、ようやく次の創作のことが彼の関心の焦点になっていく。

へ六月に這入つたら或は一才北海道まで行かねばならぬかも知れない。而して創作に取かゝらねばならぬ。（5・23）

へ私は目下（注・仕事の）中休みをしてゐますが、矢張休んでゐると気分がだらけて心のうはつらばかりがそはそはしていけません。（6・22）

へ私は次ぎの著作集の爲めに頭の中で苦しんでゐます。全く陣痛の苦しみだ。何んにも出来ないで、何かしないのが相済まぬやうな氣になつています。（7・22）

五月下旬から七月下旬にかけて書かれた書簡からの引用である。ちよつと30日間隔のこの三つの断片によって、7月下旬によく

### 『運命の訴へ』覚え書

次の創作の機が熟してきたことがうかがわれる。彼は（専心創作に従事する）<sup>⑤</sup>意気込みで7月23日から母や子どもを連れて軽井沢に出かけたが、子どもの世話にかまけて仕事にならず、28日朝、炎暑の東京に（驚城すべく）单身帰宅している。<sup>⑥</sup>ところで、彼はこの軽井沢行の前に、創作の取材のため上総一宮方面へ行く予定であつた。へ一ノ宮は先方で又いやなごた／＼が出来たので行けなかつた。八月早々行くつもり。<sup>⑦</sup>

このへ一ノ宮が上総一宮であることは、8月3日付の（今日創作の材料の蒐集をしにこゝまでやつて来ましたが果して思ふやうに出来るかと思つて心配してゐます、明日一日を費して。）という吹田順助あて書簡の発信地が（於上総一ノ宮）となつてゐることから明らかである。しかし、彼が新しい創作の舞台として取材に行ったのは一宮の町ではなく、その先の、不案内な村が聚落であつた。

へ昨日目的地に行くつもりで此所までやつて来た。予報しておいたにもかゝらず出迎へてくれないので、今日一日は空しく材料の蒐集も出来ず過してしまつた。川が一本流れてゐるといふのが一つの取柄で、あとは寄木細工みたいな所だ。：：：。<sup>⑧</sup>

有島が上総一宮方面へ取材に出かけた作品は『運命の訴へ』である。永田哲夫氏は右の書簡が示す小旅行をその取材行とみたらうえで、この作品の制作時期を大正9年8月10日前後起稿、へ一個月余

りで渋滞をきたし、四十日目頃には中止宣言のやむなきに至った<sup>①</sup>としており、上杉省和氏もこの（八月一〇日前後起稿、九月中旬執筆放棄の線は疑いのないところであろう<sup>②</sup>）と永田説を裏書きしている。わたくしは（四十日目頃）（九月中旬）といわれる執筆放棄の日を9月17日であろうと推測しているが、これも両氏の推定した範囲を出るものではない。いずれにしても、有島が上総一宮方面に出かけたのは『運命の訴へ』を書くための取材行であった。

この創作の舞台となるべき（目的地）がどこであったか、また彼が（予報しておいた）相手、出迎えてくれるはずの人物がだれであったか、前後の書簡はその地名・人名を示していない。『運命の訴へ』の主人公は、その（ノート・ブック）に（私の家の在る谷内）と書き、そこから郵便局のある（I町）までは（二里近い田舎道）だとしている。彼は（千葉の中学校）（のち、C市の中学校<sup>③</sup>）を出た人物である。（I町）が有島の取材に赴いた上総一宮であろう。千葉県地図を広げると（かずさいちのみや駅）のすぐ南に（へらみ駅）があり、そこから夷隅町方面へ山越に抜ける道に沿って、（一ノ谷・谷上・谷）という地名が並んでいる。これらの（谷）を（へやと）とよむのかどうか、たしかめてはいないが、おそらくこの（谷）が有島の目的地だったにちがいないと推測される。

有島を出迎えるべき人物は、さきに同人あての二通の書簡を引用

した粒良達二（もしくはその意を受けた者）でなければならなかった。

（其後は暫らく。御無事でお暮しですか。東京は依然として暑さが強いがあなたの処は不相変涼しい事と思ひます。私の創作は少しづつ進歩してゐますがまだ本流に這入りこまない故か筆がにぶりが勝ちでこまつてゐます。あなたの地方の俗謡でもしろうさうのがあつたら出来るだけ沢山知らせて下さい。それからこの間お目に懸つた時仰り残した大事な事柄があるならそれも。農具の名と重な農家の年中行事も亦<sup>④</sup>）

これは、9月6日付で粒良達二にあてた有島書簡第三信である。（其後）といい、（この間お目に懸つた時）というのはいつであろうか。行文からみて、第二信（2・21）の直後とは考えられない。（あなたの処は不相変涼しい事と思ひます）とあるから、この年の夏であろう。二人はこの夏にまた会つたのである。有島はこの夏に粒良の（処）を訪れて、いろいろな話を聞いて帰っている。そして（仰り残した大事な事柄）があればそれをさらに書き送ってほしい、地方の俗謡・農具の名・農家の年中行事なども（出来るだけ沢山知らせて）ほしいと依頼したのである。

粒良達二と『運命の訴へ』を結ぶ記述はそれだけではない。翌大正10年の4月・7月、さらに大正11年6月の同人あて第五信（第七

信に一筋の糸となつて続いている。

△あの創作で失脚して以来全く其方の仕事は擲つてみますが今度帰京（来月初旬）したら全力を尽して没頭して見る気であります。（大正10年4月26日付・第五信）

△私は百枚程のものを書いて新潮の七月号に発表しました。（注・「白官舎」…あなたの方のものはまだ中止したまゝです。あれもいつか筆を洗つてかゝりたいとは思つてゐますが。）（大正10年7月3日付・第六信）

△先夜はお尋ね下さいまして難有う御座いました。あなたの上の暗らい影が全然取り去られた事を何よりもよろこんでゐます。それから其節お持ち帰りの原稿若しお読みずみならば御返送を願ひます。（大正11年6月1日付・第七信）

さきに、第一信・第二信についてA・B・Cの三点を要約しておいたが、その後につきの諸点を付け加えることができると思う。

D粒良達二は、2月25日以後間もなく有島をたずね、直後に委細の話をしたであろう。しかし、有島の方は『愛は奪ふ』執筆に心を傾けていて、彼の話題をすぐ創作に結びつけては受けとめなかった。

E同志社での講演を中心に5月はじめから約3週間を関西で過ごした有島は5月22日に帰京したが、北海道に行くことと新しい

## 『運命の訴へ』覚え書

創作にとりかかることが当面する大きな仕事であった。

F北海道行きは秋に延び、〈専心創作に従事する〉意気込みの彼は7月にはいつてようやく新しい創作の糸口をつかんだ。その構想は〈暗らい影〉を背負つた粒良達二の一家に起つた〈恐ろしい運命の狂ひ〉を思わせる事件を題材として得たものである。

G彼は取材のため上総一宮に行き、8月4日に粒良達二に会うことができた。彼は粒良の案内で〈谷〉を訪れ、あらためて創作の素材としていくつかの〈事柄〉を聞かせてもらった。

H右の経緯と、『運命の訴へ』中断以降の書簡を総合して、粒良達二がその主人公のモデルであることが推定できる。（第七信でいふ）〈原稿〉は、中絶したままになっていた『運命の訴へ』の草稿であろう。）

さて有島は粒良達二をモデルとし、その心に〈大きく痛ましい〉〈棘〉を与えた事件をもとにして『運命の訴へ』を書きはじめることになった。彼がそれを創作の題材としたのは、それが〈総ての人から全然特別な事情に置かれていと思ふのは誤り〉だという確信があったこと、換言すればその大きく痛ましい〈棘〉は形をかえて作者自身にもつき立っており、その痛みに立ち向かう姿を描くこと

は作者自身の生き方とも通い合い、さらにまた多くの人たちにも通じ合う一般性・普遍性をもつことがらだと信じられたからである。

## 2 作品ノート

——死のアラベスクを背景に

(十二ノ誤り)

第十三輯は矢張自叙的にした。筆者がその不思議な記録を旅中に拾ひ出して、それを印刷するといふ結構にした。其記録を拾ひ出した因縁を小序といふやうな形ではじめにつける。其部分だけを吹田君に読んで聞かせたら、大変いゝといつてくれた。新しい形の合奏曲のやうな気持ちが出せたら本望だと思つてゐる。今は事件の背景にあたるものを書いてゐる。

『愛は奪ふ』（有島武郎著作集 第11輯）を刊行して次の創作を待ち受けていた足助素一に対するこの書簡は、『運命の訴へ』起稿とその進行を報ずるものであった。彼が〈小序〉とよんでいる部分（約10枚）のあらまはは次の通りである——。

6年前の秋の末、作者自身を思わせる小説家の〈私〉は上総の一隅をひとりで旅していた。〈私〉は日が暮れるままに小さな宿屋に泊り、そこで〈年の頃二十六七位に見える背丈の勝れて高い、瘦形の青年〉と相客になる。二人は襖を開いて夜おそくまで話し合ったが、その青年は激してくると〈まともには見てゐられない位痛々し

い〉、しかも〈不思議な無気味さ〉を感じさせるやうな表情になる。〈私〉は何度かその青年の顔の〈骨肉の部分〉が氣化してしまつて、輪廓だけが幻影の如くに残り、而してその人を導いてゐる運命そのものが、その輪廓の中から凝然として話の相手なる私を睨みつけてゐる〉ように感じる恐怖の瞬間に襲われた。わずかなまどろみのあと早発ちしようとして起きてみると、その青年はすでに宿を發つていて、〈私〉の机の上にはその青年が遺していったと思われる一冊のノート・ブックが置かれてあった。ヘフォルマリンのやうな強い薬物の香〉がしたその〈不思議な記録〉をここに紹介しよう——といふのである。

この構成からわかるように、〈自叙的にした〉といふのは作者の〈自叙〉の意味でなく、〈小序〉につづく内容が、ノートの持主がみずから語る形をとることを意味している。一人称、独白の文体である。これに類するものとしては、日記体で書かれた『迷路』序編がある。あの作品は、はじめに主人公Aの日記をおき、そのあとを作者がつづけて外側から客観的にAを描くという方法をとっていた。それがこの作品の場合は、作者と主人公の出会いのいきさつ、主人公の印象など外からの描写が先にあつてその後独白のノートがつづく形だから、ちょうど逆の構造になる。二つの作品における客観描写と独白部分の軽重は比較にならないし、『迷路』の場合は

本編にはいつてからの客観描写の部分において主人公Aが大きく変化していくのに対して、『運命の訴へ』の〈小序〉は暗示的な断片であるにとどまる。また、『迷路』の主人公Aが作者自身の過去と重なり合っているのに対して、『運命の訴へ』における作者の分身はその主人公の前にすわる〈聞き手〉である。

作者の分身が主人公とむかい合つてすわる場面は、『生れ出づる悩み』の中に二度描かれている。主人公木本が自分の絵を持ってはじめて現れたときは〈少し不機嫌さうな、口の重い、疳で背丈けが伸び切らないと云つたやうな少年〉であつたが、十年目には〈無類な完全な若者〉になつて〈僕〉を驚かせたのであつた。有島はこの作品について、〈私は……凡て、誕生を待つよき魂に対する謙遜な讃歌を唱へようとした。自然は大きな産尊だ。私はその産尊の一隅につつましく坐つて華やかな誕生を祝する歌手でありたい。〉<sup>50</sup>と書いていた。彼が『運命の訴へ』を書くに当たつて〈記録〉という形式をとり、〈新しい形の合奏曲のやうな気持ちが出せたら本望だ〉と望んだ胸中には、一個の人間の存在とその営為に広く普遍性と共感を獲得することのできた『生れ出づる悩み』の〈僕〉と〈君〉の共感・共鳴が鮮やかによみがえつていたのではないかと思われる。彼は『生れ出づる悩み』においては、主人公のひたむきな生き方を祝福する謙虚な〈歌い手〉でありえたのだから。ここでいう〈合奏〉

### 『運命の訴へ』覚え書

とは、むろん主人公と作者の合奏であろう。のちに『星座』において作中人物相互の〈合奏〉がみごとにその序曲を奏でているが、互いに心許すことを封じ合っている『運命の訴へ』のシチュエーションにおいて作者がそれを志向していたとは考えられない。

〈記録〉といい〈合奏〉を期待するといつても、『生れ出づる悩み』と『運命の訴へ』の構造は根本的に相違している。ここに一つの誤算があつたのではなからうか。〈私〉がこの〈記録〉を手に入れたのは6年も前であり、八方手を尽しても青年の行方は杳としてわからぬ、そればかりか青年とは〈恐らく永久に遇ふ折りはないだらう〉というだめ押しがくりかえされているのである。〈小序〉の終わりの部分には、あの青年は宿の〈敷居を跨ぐと、一步一步影が薄れて行つて、百歩も行かない中に、あの寒々とした秋の明方の靄の中に、永久に溶けこんで失はれてしまつたのではないか〉と〈私〉が信じているらしいことが書かれている。これは、『生れ出づる悩み』の〈君〉が〈妙に力強い印象を私に残して、私から姿を消して〉いったのと対照的である。『運命の訴へ』の主人公は、あのノートを遺書として私の前から〈永久に〉消えていったはずである。あの青年は、あのまま死んでいったのであろう。

その〈記録〉は遺書でなければならなかつた。主人公は流星のような人間の運命を具現する形象として設定されていた。一方、〈私〉

と青年が初対面——それも偶然の出会いであることにこそそれなりの必然性があると思われる。〈私〉は予期も心の準備もないままに、〈その人を導いている運命そのものが、その輪廓の中から凝然として話の相手なる私を睨みつけている〉——運命の凝視に出会うのである。〈私〉とあの青年とは、それが初対面でもしかも永遠の別れであるという一期一会を経験したのである。まさにそれは〈稀有な夜の一つ〉であったはずだ。こうして、その〈記録〉が遺書であり、その出会いが一期一会であってみれば、たがいにかわりあう時の流れのうえに流れ出す〈合奏〉を望みえないのは当然の帰結であった。未完のこの作品においてすでに〈小序〉の部分は浮き上ってしまっている。あるいは青年の独白が進行していくところどころに〈私〉が主人公の印象を回想するとか、結末の部分であらたな展開を予定するとかの構想があったのかもしれないが、それならばまた別の意味で〈小序〉から独白への導入は相当に書き改めなければならなかったであろう。結末から始まる〈遺書〉の形をとった作品としてはさき『石にひしがれた雑草』があったが、あの作品が独自に定立しうる構造を持っていなかったことはすでに述べたところである。

『石にひしがれた雑草』もこの作品も、その世界は主人公の〈眼〉と〈ことば〉から外へ広がることをあらかじめ遮断されている。作

者は主人公の〈眼〉のみをかりてすべてを観察し、主人公の〈ことば〉のみによってすべてを語らなければならないのである。彼はなぜこのような窮屈な方法をとったのだろうか。

〈同じ言葉である。然しその言葉の用ゐ方がいかに芸術家の稟質を的確に表はし出すだらう。：私は僅かばかりの小説と戯曲とを書いたものであるが、そのさゝやかなる経験からいつても、表現手段として散文がいかに幼稚なものであるかを感じないではない。私の個性が表現せられるために、私は自分ながらもどかしい程の廻り道をしなければならぬ。数限りもない捨石が積まれた後でなければ、そこには私は現はれ出て来ない。何故そんなことをしてあねばならぬかと、私は時々自分を齒がゆく思ふ。〉

これは彼が『愛は奪ふ』において詩への憧憬を語った一節である。もどかしい〈二元〉の生き方を超えてすべてを〈一元〉に合一したいというのは『二つの道』以来の彼の切なる願いであった。彼はいま、この『運命の訴へ』において、一挙に〈生生の統流を眼前に展く〉詩の方法を用いようとしたのである。上杉省和氏の言う〈現在と幾層もの過去を行きつ戻りつしながら〉展開するこの作品の〈複雑な構成〉は、散文の〈もどかしい程の廻り道〉を一足にとび越えようとしたこの方法からきたものであらうと考えられる。

手記は、息をはずませて郵便局にとび込んだ主人公(佐間田信次)

が〈鈍間臭い女事務員がぼんやり坐っている〉のを横目ににらみずえながら、〈ヘアニケサ三ジンダヨロコベ〉と電報用紙に書きなぐるところから始まる。鈍い、そのくせ驚いても知らん顔をよそおう頑固なその郵便局員のような、そのまま彼らを囲繞するI町の表情である。鬱屈した心のやり場のないこの〈田舎〉で兄は死に、自分分は生きていく。この重庄は、〈自然〉が〈農民〉を、〈都会〉が〈田舎〉を疎外するところから生じ、〈田舎〉の内部で因習によってびこり、そのまた一軒一軒の家の内部で家族が増幅しあっているものである。兄が死んだのは信次にとって一つの解放だったのだが、幾重にも幾時代にも折り重った重庄はその鎖が一つ切れたくらいのことではびくともするものではない。

へあれから又自転車で宮の橋辺の道のいゝ緩傾斜を、げんげの花の咲き盛った田圃を見渡しながら帰って行った私は、久し振りで深々と呼吸をすることが出来た。けれどもあの玉子屋の手前の片袖地蔵尊の所まで来ると、もう心が暗くなつてしまった。：私にはあの片袖地蔵尊を見るにつけて、私の家の在る谷内に住んでゐる十軒の百姓家で起つた忌はしいことが、つき／＼に頭に浮んで来たのだ。

こうして、八歳の時に見聞した左五郎のお上さんの身投げからはじまって、〈十軒の百姓家で起つた忌はしいこと〉が書き進められ

『運命の訴へ』覚え書

ていく。登場人物は、あたかも死ぬために現れるように、つきつきに死んでいく。それも定命の死・大往生でなく、無残な非業の死にまである。主人公を中心に、中絶した箇所までの登場人物の生れを書き並べると次のようになる。(●：死んだ者 ▲：死が間近に予測される者 △：いずれともわからぬ者)

- 佐間田信次 ▲ 手記の筆者。恐らく永久に遇うことはあるまい。
  - 祖父 ● 癩のため座敷牢に入れられて餓死する。
  - 祖母 ● 孫も可愛がりえないような一生を過ごして。
  - おやぢ ● 肺結核をわずらっていた。
  - 兄 ● 結核、二年近くも癩癩を起した末に死ぬ。
  - 姉 △ (まだほとんど描かれていない。)
  - 叔父 作造 △ (まだほとんど描かれていない。)
  - 叔母 △ (まだほとんど描かれていない。)
  - 左五郎 ● 柿の木で首をくぐる。
  - お上さん ● 堰に身を投げる。
  - 弥助 ▲ 発狂し、檻のような小屋に入れられている。
  - お照 △ 弥助に切りつけられて負傷し、人が変わる。
  - お松婆 ● 冬の真最中、田の水に凍りついて悶え死ぬ。
  - おあき ▲ 腹膜炎にかかり、納戸に閉じ込められて死ぬ。
- 主人公をとりまく外界の暗さは執念じみてさえない。(谷内に住

んである十軒の百姓家で起つた忌はしいことが、つき／＼に頭に浮んで来た」とあるのだから、この中ではまだどうなるかわからない人たちが現在では死に絶えてしまっているのかもしれないし、ほかにも多くの人たちが登場してきて、さまざまな断末魔の姿を示すはずだったのだろう。彼らの死を手記に書きつつづけている主人公自身も、すでにいまは生きていないことが暗示されている。鬼気迫る死のアラバスクである。

それにしても、作者は何を意図してこのような因習と狂気と死の世界を描き出していったのだろうか。彼は、9月6日付の粒良達二あて書簡に、〈私の創作は少しづつ進歩してゐますがまだ本流に這入りこまない故か筆がにぶり勝ちでこまつてゐます。〉と書いていた。8月10日前後に起稿し、16日までには〈小序〉の部分を書き終えて吹田順助に読んで聞かせ、〈事件の背景にあたるもの〉を書き進めていた。それが、〈放棄〉の前の9月15日ころはすでに〈出来ない出来ない〉<sup>⑤</sup>という渋滞状態に陥っていたことを考えあわせる<sup>⑥</sup>と、9月6日ころには、約一〇〇枚のうち相当な部分まで書き進めていたものと思われる。少くとも左五郎のおさきんは身投げし、左五郎は首をくくり、弥助は狂い、お松婆は凍死してしまっていたはずである。これらはいずれも、はじめの三〇枚でいどの間に相ついで描かれていることがらである。そして、すべて〈本流〉に入る前

の〈背景〉になることがらであった。

鐘田研一は、この作品を「一種の農民小説である」と紹介し、〈同じ谷に住んである十軒の農家に起つた色々の事件を描かうとしたのだが、中途で筆を折つたために、五軒目の家に起つた事件を描きかけたところで終つてゐる。〉〈農村の根強い習俗や、唾のやうな隠忍性や、憐光にも似た鬼気がそこにはある〉として、その中絶を惜しんでいる<sup>⑦</sup>。これらの〈事実〉や印象はいずれも作品にそくしており、その限りでは当を得たものであるが、作者の意図した『運命の訴へ』の〈本流〉は「十軒の農家に起つた色々の事件」を描いた後に姿を現わすものとして構想されていたのではあるまいか。〈自然〉に痛めつけられ、〈都会〉に虐げられるという「二重の苛斂」に圧迫された〈田舎〉——農村は因習に身をよろわざるをえなかつたし、家族といえどもみずからの生存のためには見殺すという悲惨にも直面せざるを得なかつた。逃げ場はどこにもないのである。これが次次の〈個我〉をとりまく外界である。彼はその因習と鬼気のうずまく開ざされた世界の中に生まれ落ちた以上、そこに生きぬき、その世界の中でみずからの存在を証し<sup>⑧</sup>なければならなかつた。

この作品の〈本流〉——主人公が対決すべき外界のもっとも頑強かつ先鋭な部分はまだ描かれていない。カンパスの絵の、背景の部分はすでにかなり塗り込まれている。暗く重い因習、狂気と死、憐

光にも似た鬼気……しかしそのただ中に立ちほだかる信次の仇の顔はまた白地のままである。手記の冒頭に信次は「アニケサ三ジシンドアヨロコベ」と悲鳴のようなかちどきをあげたのであったが、その彼の兄というのは、中絶の少し前になってようやく姿を見せているに過ぎない。ところがその兄は、信次がC市の中学に入学したときには「へわざわざ迎へに来てくれ」、祖父の（ひいては一族の）秘密を語り明かしてくれ、叔父叔母に対しても信次をかばう立場をとっている。その兄の死が「ヨロコベ」ぶべきことに変わった経緯がこの作品の最大のモチーフになるはずであるが、それは信次の入学以後、あるいは卒業以後に持ちあがった——または知ったものであると見ざるを得ない。彼は明治40年に「へやうやく」中学を卒業して帰省する。未整理からくる混乱かもしれないが、彼の中学生生活は7年もかかっていることになる。中学を卒業して国に帰ったその初夏のころから「格段に私は今私があるやうな人間にならうとしてゐたのだ」と書かれている。この箇所は「私の大祖父は癩病患者だ。おやちとおふくろと兄貴とは肺病人だ」という主人公の告白があり、その意識からみつかれた「俺はもう半腐れのデカダンだった」と、一人称の「私」が「俺」に変わる。この前後に彼は「自分で自分の鋭敏な官能をごしごしと失望のやすり、で磨り減ら」す強烈な体験をしている。その「事件」がどのようなものであったのか、未完の「作品」

### 『運命の訴へ』覚え書

はそれを語っていない。兄に対する敵意のよってきた原因を常識的に推し測れば、父亡き後の家長としての重圧、不治の病を患っていたことが家族のくびきとなっていたことなどが思い浮かぶが、はたしてそういうことだけであったのかどうか、わからない。しかしいずれにせよ、この作品の「本流」は、彼が中学に入学してから描き出されていくはずである。

C市から迎えに帰ってくれた兄に連れられて谷を登ち、雨の降る道すがら祖父の非業の死について聞かされた十二歳の信次は目のくらむような衝撃を受け、「別れてはならない少年の心を、無理やりにもぎ取られ」ていくのを感じる。いま半生を顧みて「人間といふものは結局子供のやうな心と生活とに帰りたいが為めに、ありとあらゆる努力をしてゐるのだ」と述懐する彼にとって、その秘密がどれほど大きい疎外要因となったかは察するに余りある。I町にはいったときには日が暮れていてその晩は叔父の家に泊めてもらうが、眠りにつくとも夢ばかり見つける。翌朝、目がさめると同時にその祖父のことを思い出し、それからというものは、彼が「祖父の晩年に起つた忌はしい事件を思ひ出すのは決つたやうに朝眼が覚めた時」——「一番快活な、勇み立つた気分になるべき時」ということになった。その「忌はしい事件」もまだ詳細には描かれていない。おそらく未完の部分に引きつづいて書かれるはずだったのであろう。そ

して、彼はそれを背負って、人生のへ一番快活な勇み立つた気分になるべき』青春の門をくぐるはずだったのであろう。

上杉省和氏は、へわずかに暗示されている主人公の、父及び兄との対立・葛藤や都市での学生生活と青春の諸相とが描かれて完結を見たなら、画期的な長編小説となったであろう」とし、へその後、青春群像を描いて、これも未完に終わった『星座』が書かれたことを考えると、有島は『運命の訴へ』で果せなかつた試みに再び挑んだという見方が出来ようか」と、ひかえ目にはあるが二つの作品を結んでとらえている。注目すべき指摘である。もちろん、『運命の訴へ』の世界と『星座』の世界とは地つづきではない。信次を待ち受けていた中学での生活は、むしろ『星座』の青春群像とは対照的に、おのおのが重く暗い運命を背負っていてそれゆえに互いに支え合い励まし合うのでなくさらに深く傷つけあう態のものではなかつたかと思われる。手記の冒頭からはじまる主人公の外界に対する無差別に近い敵意がそうした精神形成を思わせるのである。しかし、そうであるからこそ、二つの作品は近縁性を持つ——背中合わせであると思える。無媒介にはないが、『運命の訴へ』は『星座』を焼き上げるためのネガ・フィルムとなったのである。

こう見てくると、へ小序へにはじまっていま形を現わしている『運命の訴へ』はすべてなお混沌たる序章である。有島は『愛は奪

ふ』においてへ二元への生き方を求めるへ個性への主張を次のよう  
な自己確認から始めている。

へ恐るべき永劫が私の周囲にはある。私はそのものへ隅か、中  
央かに落された点に過ぎない。私は永劫に対して私自身を点に  
等しいと思ふ。永劫の前に立つ私は何ものでもないだらう。それ  
でも点が存在する如く私も永劫の中に存在するへ。

自己をはて知れぬへ永劫へのひろがりの中のへ点へとしてとらえ  
る孤立感・孤絶感はそのまま『運命の訴へ』の主人公の立脚点であ  
る。彼はへ総ての俺の過去を書き上げて見た時：どうかして奇跡の  
やうにそこから確かな生に対するへ路が開けたりはしないかへと  
奇跡を祈るような口吻をもらしているけれども、いかにもそれは見  
通しのない道であり、勝目のない賭であった。この一文は、さきに  
引用した粒良達二あて有島書簡のへあなたがあなたの全努力を惜し  
む事なくば自ら其中に一道の大路が開けわたる事を知るものですへ  
という一行と符合している。実生活におけるへ全努力へをよびかけ  
た激励のことははじゅうぶんな説得力をもっている。しかし、すべ  
てのへ過去を書き上げへるといふへ永劫への闇への咆哮は、それと  
は全く異質の営為であらう。野島秀勝氏は、へここにこそ「人生の  
可能」があると一生を費して信じ当てたものが実は不可能でしか  
ないことを見知った者に、その後何が書けるだらう。『運命の訴へ』は

完結する筈もなかった。』<sup>⑧</sup>と言いつ切っている。この作品が未完に終わらざるを得なかった必然は、作者が『或る女』の（人生の残酷完

璧なアイロニー）にうちのめされた事態のなかに予定説にいうようにはりついていたとみるのである。たしかに、この作品のシチュエーションのもとにおいては、〈永劫〉の闇の広がり身を焦がして横切っていく流星の軌跡のような生きざま以外のものを描くことはできないだろう。〈俺〉のはげしい生きざまがもたらすものは〈確かな生に對する一道〉の見通しなどではなく、そのはげしさのゆえに無残な光江を放って消える一つの〈個性〉の終焉——〈人生の不可能〉の追認であつたと思われる。作者はそれを、作なかばに見てしまったのである。〈如何したものか更らに力が這入らない、薄皮一枚がめくれない。〉〈自分のものが凡て駄目糞に見える。かう急驟な状態になつては何んにも出来さうもない。〉〈私には depression が来しました。〉……いずれも放棄直後の書簡からの引用であるが、みずからのうちに抑えていた不安・悲嘆があらわに吐き出されている。この先彼は、もういちど実生活に目をむけなおし、農場解放を実行に移す準備をはじめ、それをひそかに〈宣言〉することによつて『星座』に向かつて伸びる一筋の道をひらいていくのである。

### 『運命の訴へ』覚え書

### 3 挫折から転機へ

#### ——二つの〈宣言〉

大正9年9月24日の「読売新聞」文芸欄に次の記事が掲載された。

〈有 島 武 郎 氏 原 稿 を 破 棄 す

文壇の驍將有島武郎氏の心血を濺いだ「有島武郎著作集」は既に第十一輯まで刊行され、数知れぬ読者の憧憬の的となつてゐる。所が氏は其の第十二輯として新作長篇小説「運命の訴へ」を刊行す可く、去七月頃から起稿に着手し、その後もモデルの研究に旅行を試みるやら苦心慘憺、此九月まで二百枚余りを脱稿した。然るに最近突然にも其の原稿が全部惜しげもなく氏自身の手によつて破棄された。それは氏の芸術的良心が其の作の発表を許さなかつたからだとの事である。斯くて氏は最近自分の芸術境に疑懼の念を起し、それが為めに人知れぬ苦惱に襲はれつゝあると云ふが「著作集」の第十二輯は、そのために紀行文を集めた「旅する心」を以て充てられるとの事である。〉

この記事が掲載されて間もなく、谷川徹三・原久米太郎・井上お初・浅井三井（以上9月27日付）・吹田順助（10月1日付）らに出て出された有島書簡<sup>⑨</sup>は、それらの友人知己が彼を案じて見舞の便

りを送ったことを直接・間接に物語っている。おそらく多くの愛読者がこの記事に衝撃を受けたことと思われる。

少しさかのはるが、9月15日夜、彼はまだ投げ出していない。第12輯のための原稿を待っていた足助素一に対して彼は「創作は出来ない出来ない。今度位苦しんだことはない。而して今度位出来ないことはない。：原稿を焼却して旅に出ようとする誘惑に幾度か襲はれる。心持ちがすつかりぐれてしまった。」と書き、また浅井三井に「おのがつむましろき糸の中にして蚕の如くにもわれは死なまじ」と滅入るような歌を書きながらも、なおこの作品を手放してはいなかった。越えて9月17日夜、同じく足助にあてて、

へ：僕は又自分の生活の或は思想の変換期に來たのではないかと感じてゐる。その渡しを渡つてしまはなければ此衰退は治らないのではないかと思ふ。何しろ底知らぬ淋しさを感じる。

では兄には誠に濟まないけれども「旅する心」を纏めさせて貰はう。：本当に濟まなく思ふが何卒推想してくれ給へ。

と書き送っている。有島から足助へ、足助から有島へ、そしてもういちど有島から足助へとまる二日のあいだでの書面の往復である。15日夜の有島の書面は「使のもの」が届けたようであるから、善後策をどうするかがおそらくその夜から足助の方の課題になったであろう。有島の書面の書き出しには「こちらも無沙汰ながら、兄の方

からの消息もきかないので」とあるところからみて、足助の方でもこの作品の難渋は予測していたとしても、ここまでの事態に陥っているとは思いがけなかったであろう。それだけに、事態を受けとめてそれに代わる企画を案出するまでには相当な考慮を要したに違いない。有島がその結論を受け取ったのは17日になってからだと思ふ。17日付の書面の、「では」という表現も一日置いてからの言葉ではないだろう。有島は「も」もなくその代案にとびついた。彼には、久しぶりに味わう、しかしさびしい解放感があったと思われる。あとの書面の文末には、「どうも難有つ。今日は母と子供とを連れて目黒に栗飯を食ひにいつた。」という一行がある。あるいはその日の足助の返事をもらう前であったかもしれない。そうであれば焦燥感のただ中にいたことになるが、それはどちらであつてもわたくしの頭に浮かぶ一つの情景は変わらない。新しい季節の來たことを感じさせる栗飯のだが、彼にとつて「自分の生活或は思想の変換期」の命題は、思えば近くて遠い重大事でありつづけた。いつまでも勝気な、それでいてめっきり老け込んだ母と、箸のあげおろしもまだあぶなっかしげな三人の子どもたち——老幼四人の家族に囲まれて黙々と栗飯を食っている男やもめがそこに居る。子どもこぼした飯粒を拾ってやりながら老母のぐちゃい話にいちいち相槌をうっている彼の胸中はどうなものであつたらう。沈みふさいでい

く胸のうちに、それをいつ切り出すか、どう切り出そうかと、老母のヒステリックな反撥を招くに違いないその重大事を、彼はじりじりしながら反芻していたに違いないのだ。

翌9月18日からは、旧稿を補筆浄書して『旅する心』にまとめる作業にとりかかった。9月20日の「よみうり抄」にはへ▲有島武郎氏、著作集第十二輯「旅する心」を生込澁文閣より近刊。の記事がみえる。20日夜は草の葉会、22日の「よみうり抄」にへ▲有島武郎氏、来月十二、三日頃北海道に赴き暫く滞留する積りだとの記事が出た。彼が『旅する心』をまとめ終えてその「書後」を書いたのは10月10日であるが、その間、彼の念頭には北海道行の計画があった。この北海道行きの目的は懸案の農場問題——それも解放実行の糸口をどうつけていくかという計画をたて、その準備をはじめることであった。『運命の訴へ』にとりかかる前、6月12日付の原久米太郎あて書簡に、再婚問題について悩まされていることをした後、へ処が僕には御承知の生活問題が先決として頭に在る。最近にそれを母に申出て仕舞はうか如何しようかと迷ひぬいてゐる所だ。とあり、その半月ばかり後にへこの度の御上京については感謝の言葉がない。問題の解決の直接の結果は起らなかつたが、解決の爲めにどれだけの暗示と便宜とを得たかわからない。と<sup>41</sup>という同人あての礼状がある。『運命の訴へ』が挫折してへ生活或は思想の

### 『運命の訴へ』覚え書

変換期に來たのではないかと考え込まされたこの時期に、農場解放をいついかにおこなうかが最大の課題として浮上していたことに疑問の余地はない。高山亮二氏もまた、綿密周到な農場問題の追尋をふまえてへ彼が自己の創作の不振の原因を思想と実生活との矛盾——その解決策としての農場放棄を真剣に考えはじめたのは、大正九年『運命の訴へ』を書きかけ中途放棄して以後から始まる。と<sup>42</sup>している。

この秋の北海道行きは、10月13日出発・25日帰京とおよそ2週間に及んではいるが、途中吹田順助をたずねて山形に立ち寄っているので、道内での滞留はわずか6日間、終日農場にいたのは18・19・20日の3日間だけである。しかしその間、10月19日付の足助素一宛書簡にへ例の決心はいよく、堅く一部分解放の事に定めてゐる。と<sup>43</sup>という一つのへ宣言があらわれる。

10月23日付の原久米太郎あて書簡の発信地はへ於札幌森本氏方となつてゐる。文中にへ十一月の六日には森本君と大阪で講演し……とあるところからみて、このへ森本氏<sup>44</sup>は森本厚吉である。有島はへ二十一日出札講演<sup>45</sup>しているから、同夜と22日夜、森本厚吉方で二泊したものと推測される。高山亮二氏によれば、

へ大正九年の有島の農場処理の決意は、……(1)有島の思想的動揺と創作上の行き詰まり、(2)森本の同調と彼の事業の必要性、(3)吉川

の米作転換への執念——など三者の一致から生まれたものと思われ<sup>④</sup>る。

ということである。有島にとって年来の懸案であった農場解放が、ともかく理論面および実務面での協力者を得て、そのプログラムの端緒をつかんだこの6日間の意義は大きい。農場と札幌におけるこれらの日日は、彼にとって最後の折り返し点となったのである。

ところでこの北海道行きを期して、彼はもう一つ形を変えた〈宣言〉をしていたのではなからうか。それは、本多秋五氏があの有島論の劈頭に引用した短編——『卑怯者』である。本多氏は、『卑怯者』は、彼の私小説系統の作品のうち、とくに出来のよくない方の作品、作者の気の弱まりから生れたやうな作品であるが、それだけに作者の人柄、少なくとも人柄の一面はよく窺はれる作品のやうに思へる。』と書いた。紅野敏郎氏も、この作品を〈四十三歳の有島の優柔不断の側面〉である。(注・『迷路』と)共に人生のある時期のたゞずみの姿である。然し何と『卑怯者』が日暮れて道遠い感じがすることだろう。』と書いている。主人公の〈彼〉はいかにも気の弱い、優柔不断な、齒がゆい男である。この主人公には、たしかに作者自身の〈人柄の一面〉が投影されている。しかしこの作品の創作意図はそれを描いてその中に沈潜することにあつたのではなく、自虐的な自画像を描くことにあつたのではないと思う。おそらくそれ

は、いとわしいきのうまでの衣裳として脱ぎ捨てたもの、実行を逡巡するおのが心の弱さをこの一編に封じてそれとの訣別を裏返しに〈宣言〉したものでなからうか。本多秋五氏はこの荒筋を紹介しただすぐ後につづけてこの主人公に似た気持がさきに作者にあって生まれた〈完全な寓意小説であつたのかも知れない〉と推測している。しかしこれは、もう少し異った意味での〈寓意小説〉であつたと思われるのである。

この作品の末尾には、〈一九二〇年十月二十三日、北海道旅行中〉という注記がある。すでに述べた通り、大正9年10月23日は離札の日であつた。それは、懸案の農場問題について、全面かつ即時といたのではなかつたにもせよ解決の糸口をつかんで帰京の途についた、彼にとって記念すべき日であつた。同じ日の吹田順助あて書簡には、〈十月二十三日朝 列車中〉とある。彼はこの23日の〈朝〉、すでに車中の人となつていたのである。この〈二十三日〉という日付も一つの虚構だったのかもしれない。

『卑怯者』の主人公が作者自身(の訣別しようとしている姿)であることにまちがいはないが、なだれ落ちてくる牛乳瓶に滅多打ちになつている孤立無援の少年の姿に、実生活のしがらみに氣息奄奄としてゐる作者の〈個性〉が仮託されていることも見落としてはなまるまい。〈あゝしてゐるとやがておほ事になる〉——いまこそ決断

と実行があるのである。この作品を書いて「現代小説集」に〈特に執筆したところの新作小説〉として発表した彼の胸中には、二度とこんな作品を書いてはならないと深く期するものがあつたに違いない。彼はこの段階で、農場放棄を頂点とする生活改造によって『運命の訴へ』の挫折という形でさらに深刻になった〈落潮〉を〈満ち潮〉に転ずる契機をつかもうとはかった。農場の部分解放を足助に明言したことと『卑怯者』を発表したことは、その道からの後退を封じるための自らへの〈宣言〉であつた。〈潮〉はいつ変わるか。『星座』の前身『白官舎』が「新潮」に掲載されるのは翌大正10年7月のことである。大正9年冬、〈落潮〉の夜はまだ明けない。

(注)

- ① 八木沢善次あて書簡 大正9・9・21 (叢X・一〇三八)  
 以下、とくに断らず巻次・ページを示したものは新潮社版「有島武郎全集」によるもの、右のように〈叢〉と付記したものは叢文閣版全集によるものである。なお、作品・評論は新潮社版全集をテキストとしたが原則としてページは示していない。
- ② 永田哲夫『「運命の訴へ」制作時期——有島武郎覚書』(昭和40・12 高知大「学術研究報告」14巻・人文科学9号)
- ③ 上杉省和『有島武郎覚書——「運命の訴へ」を中心に』(昭和48・12 静岡大人文学部「人文論集」24号)

『運命の訴へ』覚え書

- ④ 「近代日本総合年表」(昭和43・11 岩波書店)による。
- ⑤ 粒良達二あて書簡 大正9・1・18付(叢X・九〇一)
- ⑥ 同 〈第2信〉 同年2・21付(叢X・三九一〜三九二)
- ⑦ 大橋房子あて書簡 大正9・2・28付(山田昭夫・内田満 共編「近代文学研究資料9有島武郎」中巻 昭和50・6、桜楓社、所収)
- ⑧ (叢X・一〇三〇)

- ⑨ 原久米太郎あて書簡 大正9年1月7日付 (Ⅷ・三八四)
- ⑩ 大正9年3月5日〈よみうり抄〉に〈有島武郎氏 新著「惜みなく愛を奪ふ」を近く叢文閣から出す」と予告している。しかし実際には〈僕はまだ「惜みなく愛は奪ふ」に取りかゝつてゐない〉(原あて書簡・3月11日 叢X・九二八)〈仕事の方はまだ手がついてゐません。…創作をする前にいつでもさうであるやうに物淋しい悲哀の日がつゞきます〉(浅井あて書簡・3月12日 叢X・九三〇)というような仕切直しのすえ、3月15日から31日までの約半月間に一挙に書き上げられたようである。(Ⅵ・二五六) また4月1日の遠山陽子あて書簡(叢X・九三四)にも脱稿を報知する文がある。
- ⑪ 足助素一あて書簡 大正9・4・30付(叢X・九五一)および原久米太郎あて書簡 同 5・23付(叢X・九六四)による。

- ⑫ (順)に、叢X・九六四、叢X・九八七、叢X・九九九〜一〇〇〇)
- ⑬ 大正9年7月7日〈よみうり抄〉に〈有島武郎氏 本月中旬 軽井沢に避暑 同地にて専心創作に従事する〉とある。
- ⑭ 八木沢善次あて書簡 同年7・29付(叢X・一〇〇三)
- ⑮ 足助素一あて書簡 同 7・〔24〕付(叢X・一〇〇五)この書簡の日付推定については、前掲書(注⑦) 書簡目録補注(二五二ページ) 参照。
- ⑯ 同 8・3夜 (叢X・一〇〇六)
- ⑰ 注②と同じ。
- ⑱ 注③と同じ。
- ⑲ はじめ〈千葉の中学校〉(Ⅲ・一六二)とあったが〈C市の中学校〉(Ⅲ・一六七)に変わっている。作者が、上総一宮をはじめ千葉県下を舞台に想定していたことがここからもわかる。
- ⑳ 注③と同じ。
- ㉑ 粒良達二あて書簡〈第5信〉大正10・4・26(叢X・一一五七)〈あの創作〉の継続ではなく、創作活動に〈全力を尽し〉たいというのであろう。この〈仕事〉の一つとしてまとまったのが、大正10年6月19日に「新潮」に原稿を送り、同誌7月号に掲載された「白官舎」である。
- ㉒ 同 〈第6信〉大正10・7・3 (叢X・二一九七)
- ㉓ 同 〈第7信〉大正11・6・1 (叢X・一四〇二)
- ㉔ 原久米太郎あて書簡 大正9・5・23 (叢X・九六四)
- ㉕ 足助素一あて書簡 同 8・16 (叢X・一〇二二)
- ㉖ 広告文「生れ出づる悩み」(V・三九三)
- ㉗ 小稿『有島武郎の創作方法(下)』——「石にひしがれた雑草」から「或る女」へ(昭和51・2「同志社国文学」11号)
- ㉘ 『惜みなく愛は奪ふ』(Ⅶ・二三六)
- ㉙ 注③と同じ。
- ㉚ 〈手記〉なかばであるため、登場人物についての叙述がひとりひとりについて繁簡さまざまである。またたとえば弥助の場合、檻のような小屋に入れられたのは信次が中学を卒業した年の夏のことであるから存命している可能性は乏しいが、すべて記述のままに従った。
- ㉛ 足助素一あて書簡 大正9・9・15夜 (叢X・一〇三五)
- ㉜ 鐘田研一『運命の訴へ 解説』(昭和14・7「解説武郎創作全集」第4卷所収、新潮社)
- ㉝ 注③と同じ。
- ㉞ 野島秀勝『詩への逸脱——有島武郎論』(昭和40・3「文学界」)

③5 (順に、叢X・一〇三七、同・一〇三九、同・一〇三八)

③6 (叢X・一〇四一〜一〇四四)

③7 注③1と同じ。

③8 (叢X・一〇三四)

③9 (叢X・一〇三五〜一〇三六)

④0 (Ⅵ・三二三〜三二四)

④1 (順に叢X・九七九、同九八七)

④2 高山亮二『農場解放について』(昭和47・11「有島武郎研究」所収、右文書院)

④3 この間の消息は書簡(叢X・一〇四四〜一〇五〇)によった。

④4 (叢X・一〇四六)

④5 (叢X・一〇四七〜一〇四八)

④6 高山亮二『有島武郎研究——「農場」へ家への視点を中心にして』(昭和47・9 明治書院)

④7 本多秋五『日本リアリズム最後の作家——有島武郎の文学』

(昭和28・2「文学」)

④8 紅野敏郎『有島武郎——「星座」覚え書』(昭和31・1「明治大正文学研究」18号)

④9 このような私小認識は必ずしも一般的でないかもしれない。しかし有島武郎の場合は、たとえば『平凡人の手紙』な

『運命の訴へ』覚え書

ど、実際行動の一種の予行演習(?)ととれる例がある。

⑤0 (叢X・一〇四八)

⑤1 大正9年11月13日「読売新聞」